

前原 (メーバル)

あてき潟原

現在の前原帯は『おもろさうし』に「あてき潟原」と謡われ、かつては、大きな干潟であった。「あてき」は、美称で立派なと解される。「潟原」は地名用語で入江、干潟、潟湖などの意味がある。

この潟原に江洲、宮里、高江洲の丘陵地から流れ込むジャーガル土が、長い年月をかけて肥沃な沖積平野を形成した。この恵みの地に首里那覇あたりから田舎下りし屋敷を形成した前原の先人たちは、一家の生活を守るべく、かつ士族としての誇りを保つべく、朝早くから日が暮れるまで寸時を惜しまず働いた。その勤労精神で、かつて砂糖生産王国といわれた具志川の中でも、生産高は第1を誇るまでになった。

涙橋とトゥールーガマ

前原の字内を地元では「イーガー(カーラ小)」と呼ばれる小川が流れて

いる。江洲・宮里あたりから流れてくる小川だが、かつては水量も豊富で、通称「江洲川」と呼称されている。

イーガーと呼ばれているのは、川の上流からの土砂が川底に堆積し、長い年月の間に周囲の土地よりも高くなつたことで、「天井川」となり、イーガー(上川)と呼ばれるようになったと考えられる。

この川の中流に「涙橋」と呼ばれる橋があるが、現在では橋というより道路のような状況になってなかなか気がつかない。かつて葬式の際に高江洲あたりから、幸崎・徳森方面の墓地に行く途中、ここで一時足をとめ、最後の故郷との別れ「島見せ」をしたというので、「涙橋」の名がついたという。昔の人々の死者への思いを知ることができる。しかし、その由緒ある橋を今では知る人は少ない。

前原には、トゥールーガマと呼ばれる聖地があるのでこの付近は「トゥールーガマ屋敷」ともいわれた。王国時代に首里からの奉公婦りの若い男女が、雨に降られ、ここで雨宿りをしたことが縁となり結ばれたという伝説があつて、縁結びの神・子宝の神として現在も拜まれている。トゥールーガマの名は、大きな岩の空洞を通り抜けることができるので、この名がついたという。

前原市 (地区)

終戦直後、米軍政府の監督のもとに県内に十六の市(地区)が置かれた。前原帯は一時八千人を超す難民収容所であった。その時にこの地名をとつて前原市となり、その範囲は、勝連村・美里村・具志川村・宜野湾にまで及び、人口は四万人を数え、前原中央倉庫・前原警察署・裁判所・前原地区病院など主要施設が置かれた。一九四五年の九月に住民の選挙による市長選挙、市議選挙が実施されたが、これは日本本土に先駆けて婦人に初めて参政権が与えられた選挙である。

ちなみに選挙の結果、市長には、地元豊原出身の當銘由伸氏、議長には當間重剛氏が当選している。

また、他に当選した議員二五名の名簿をみると田中武助、西平守由、大庭正次など戦後の沖縄の復興再建に尽力した錚々たる方々が名を連ねている。

県内に多い前原地名

県内には、原名(小字)地名を含めると二百ほどの前原の地名がある。地元での読み方はそれぞれマエハラ・マエバル・マエバリ・メーバル、メエバルなど

様々であるが、本市内の前原は、方言ですべて「メーバル」になっている。

前原の地名は高江洲の屋敷だったので「高江洲の前の方にあるところ」という意味になる(西部の方は江洲下原屋敷と呼ばれていた)。前原は平成二年に創立六十周年を迎えて式典・祝賀会を開催、立派な記念誌を発行している。

旧石川市の前原は、二市二町合併の時に二つの前原の混同を避けるため、石川前原とした。宜野湾市の真栄原は、もともとは嘉数の前と呼ばれ、明治三六年の「中頭郡宜野湾間切嘉数村全図」では「前原」になっているが、昭和十四年に真に栄えるところ(原)という願いをこめて「真栄原」にしたという。

前原は方角、位置を表す地名なのでその反対の後方を意味する「後原(クシバル・イリバル)」「尻原(シリバル)」の地名も数多い。

近年は時代の進展とともに環境の変化も著しいが特に前原帯の変化は、目を見張るものがある。かつてサトウキビの葉が揺れ、稲穂がなびいていた純農村だったが、環状線がはしり、全国でも知られる大型店舗が進出し、市街化しつつある。